

目次

はじめに

訳者 近藤弥生子

8

著者・李雅卿によるまえがき

23

第一部 「自主学习」の土台を築く

第一章 自主学习の大前提

26

自主学习とは何か

自分自身に絶えず問いかける

子どもたちから学ぶ

自主学习で得られること

第二章 自主学習の始め方

「これを学びたい」という意欲

なぜ「私」は学ぶのか？

「自律」とは何か

教育者と自主学習者の役割

第三章 自主学習は容易ではない

自主学習のプロセス

一、解放期

二、混乱の自己中心期

三、変容期

四、成熟した後の帰還期

自主学習のリスク

討論が人生の扉を開く

世界とうまくコミュニケーションするために

自主学習の魅力

第四章

保護者・教師・子どものコミュニケーションのあり方

柔軟な心を持つ

保護者の役割

話し合う文化の確立

話し合いのための原則

第五章

話し合いの文化を築く——家庭編

「尊重」と「放任」を区別する

意志の鍛錬

子どもに自信を持たせる

子どもたちへの接し方

捨てるべき概念と確立すべき概念

第六章 話し合いの文化を築く——学校編——

110

「制度」を真似してもうまくいかない

教師が幸せであることが大事

規律を守る

第二部 「自主学習」実践のための心得

第一章 自主学習者の学び方

130

「自主学習」するかどうかを決めるのは自分

自分らしく生きるには

自らに責任を持つ

学習スタイルと学習方法

どういう状態を「学んだ」と呼べるのか？

自主学習の喜びと困難

具体的な学習ルール

助けを求めることを恐れない

第二章 自主学習者へのアドバイス

168

付録 日本語版の刊行にあたって

唐宗浩

201

プロフィール

207

解説 オルタナティブを育む社会へ

永田佳之

211

日本の読者に向けて、書名、構成、章タイトル、見出し、レイアウトなどは適宜、日本語版のオリジナルで制作しています。

はじめに

訳者 近藤弥生子（台湾在住ノンフィクションライター）

台湾の前デジタル大臣として世界的に注目されるようになった、オードリー・タン氏。生まれながらのギフトッドである彼女には、主流の教育に相容れず、あいまい小学校時代に不登校となり、後に中学を中退した過去がある。

そんなオードリー氏を支えた母親が、この本の原作者である李リー・ヤーチン雅卿氏だ。

本書は、正規の学校に通わず、家庭で学習するホームスクールや、フリースクールなどを含むオルタナティブスクールを利用しながら、子ども自身が自主的に行う学習「自主学習（Autonomous Learning）」に向けての心得や具体的なメソッドについて、ヤーチン氏の経験をもとに書かれた『自主学習理念六講 知、行、悟的流轉』（二〇〇六年）と『自主学習手冊』（二〇〇八年）という二冊の原作本を一冊に合本したものだ。

台湾において「自主学習」は、自宅で行う学習に限定されない。ホームスクールやフリースクール、その他、さまざまな外部リソースを活用しながら、子ども自身が自分の学習を組み立てて実行することを示す。本書でも、「自主学習とは自分自身を学習の主にすることであり、独自に一人で学習すること（いわゆる「独学」）とはまた別のものです。また、頼れるのは自分だけというものでもないですし、教師に指導を仰いではならないとか、仲間たちとともに学習してはならないといったものでもありません。」と、ヤーチン氏が述べている。

日本の国公立小中学校で、不登校の子どもたちが増加しているというニュースを目にすることが多くなった。二〇二四年には過去最高の増加率を記録し、三四万人を超えたそうだ。

そんな子どもたちの多くが、ホームスクールで学習を進めている。子どもたちにとっての居場所をつくろうと、各地では有志らによってフリースクールが設立されてもいるが、事態は楽観視できない。不登校児の保護者たちは、仕事と家事に加えて、子どもの学業の

フォローまで担わねばならず、肉体的にも精神的にも負担は大きい。そして、日本ではまだまだ主流以外の選択肢である「オルタナティブ教育」への認知が限定的であり、手探りで日々を過ごしている当事者も多いと聞く。

そうした今の日本にとって、このヤーチン氏による指南書は大きな手がかりとなってくれるはずだ。なぜなら、本書はまさにホームスクールを含むオルタナティブ教育に対する概念がほとんどなかった頃の台湾で、ヤーチン氏が保護者や教育者たちに向けて書いた「自主学習」についての指南書や講演記録をまとめたものであるからだ。

原作の読者や、講演会を訪れた人の多くは、主流の教育に相容れない子どもを抱え、子どもたちの今とこれからにどう向き合っていくべきかを模索する中で、台湾におけるオルタナティブ教育の先駆者となったヤーチン氏の経験に学ぼうとした。きっと今、日本で本書を手にとってくださっている皆さんと同じなのではないだろうか。

当時の台湾も、私には相当に絶望的な状況だったように思える。ヤーチン氏が二人の子どもたちを育てていた時代の台湾は、義務教育下にある子どもが学校に登校することを監

督する法令が存在し、不登校児の保護者に対する罰金が科せられていた。また、子ども同士を競争させ、順位づけするような教育だったし、まだ当たり前に体罰が行われていて、保護者の多くが「体罰を与えることで、子どもをしつかり躰けられる」と信じていた。幼いオードリー氏は登校拒否を訴えるが、家族や親戚までもが「子どもが学校に行かないなんて、あり得ない」といった反応で、大きな摩擦が生じてしまった。

オードリー氏は当時の心境を「筋肉を鍛えすぎると怪我をして、靱帯や骨を損傷すると一生回復するのは難しくなるように、当時の学校の状況は、私の極限を超えていた」と回想していた。こうして一度は世界に絶望したオードリー氏だったが、子どもを信じ、救おうと立ち上がったヤーチン氏を通じて、多くの協力者たちと出会い、自分や世界と和解することができた。ヤーチン氏は自分の子どもが教育の場で窒息しそうになり、また同じ場所で命を取り戻すのをこの目で見たことによつて、「教育に対しての見方が変わった」と、自らの手記『成長戦争』（二九九七年、絶版）で綴っている。

私はオードリー氏についての評伝『オードリー・タンの思考』（二〇二二年）を執筆した

縁から、その母親であるヤーチン氏によって二〇年以上前に出版され、台湾でベストセラーになった『成長戦争』を日本に向けて翻訳し、引用しながら紹介する書籍『オードリー・タン 母の手記「成長戦争」』（二〇二一年）を出版した。

そこには、今私が暮らしている民主的な台湾社会からは想像もできないような教育現場の様子、その中でギフトエッドであるオードリー氏とその母ヤーチン氏が苦悩し、自分たちが信じる人生を切り開いていく様子がありありと綴られていた。

その大きな転換点が、「自主学习」という概念との出会いである。

登校を拒否し続けるオードリー氏のために、世間に向けて絶え間なく「申し訳ありません」と頭を下げ続けていたヤーチン氏だったが、最終的にオードリー氏が小学校の休学を決めたとき、意外にも周囲の子どもたちが「なんできみは休学できるの？ 僕はだめ？

どうやってお父さんお母さんを説得したの？ もうきみは自由だね！」などと言っとうらやましがったことをきっかけに、「子どもが毎日通いたくなる学校ってどんなものなんだろう？」と考え始めるようになった。

その後、同じくギフトエッドであるオードリー氏の弟・唐宗浩氏もまた、「ママ、選んで。

タン・ゾンハオ

国に罰せられるか、頭がおかしくなった子どもを持つか」と、ヤーチン氏に迫り、登校拒否となったのだった。

そのような流れから、ヤーチン氏は仲間の保護者たちとともに台湾のオルタナティブスクールの先駆けとなる「種^{たね}の親子実験小学校」を一九九四年に設立し、台湾のオルタナティブ教育の黎明期^{れいめい}を担う人物の一人となった。台湾では広義のオルタナティブ教育を「実験教育」と呼び、それを実践する学校を「実験学校」と呼んでいる。

「種の親子実験小学校」が他の学校と大きく異なるのは、「自主学習」を実践しているということ。具体的には、必修科目以外の時間割を子どもたち自身が決めるという点だ。学校が開いているあいだ、語学・算数・自然・音楽・図工・手工芸などの教室や、実験室・図書室・工場・農場などの場所が解放され、子どもたちは「空っぽの時間」と呼ばれる授業のない時間を使い、好きなように過ごすことができる。担任教師を自分で選び、学年ごとに分けることはしない。

この仕組みをつくるきっかけになったのは、児童向け哲学教室で討論クラスを受け持っていたヤーチン氏が、子どもたちから言われた言葉だった。「もし学校が僕ら子どもに、

自分が何をどう勉強するのかを決めさせてくれたら、今よりずっと意欲的に勉強できるのに」「大人たちが僕たちにチャンスを与えないから、証明できないんだよ」と言われた彼女は、思わず「もし私たちが学校を創ることがあったら、子どもたちが自主的に勉強できる学校にする」と答えたという。

当時の台湾は、一九八七年に戒嚴令が解除されてもなお、多様性を認めない教育が根強く残っており、民間の個人が国民教育に携わることとは法令で禁止されていたような状況だった。それでもヤーチン氏や、志ある保護者や教育者たちが団結し、時にはデモを起こし（一九九四年「四一〇教育改革デモ」、自分たちが必要とする教育を実現していった。一九九九年には小中学生、そして二〇一一年には高校生を対象にしたオルタナティブ教育の合法化にこぎつけた。二〇一四年には「実験教育三法」と呼ばれる三つの関連法を成立させ、実験教育を「学校形態（公立・私立）」「公立学校が民間に委託する形態」「学校以外の形態（機構・団体・個人）」の三種類に分けて認可させるなど、さまざまな改革がなされた。

この影響は非常に大きく、二〇一七年時点で七三校^{*1}だった台湾のオルタナティブスクー

ル（学校形態）は、二〇二四年には三種類を合計すると二二六校^{*2}にまで増加。二〇二三年時点でオルタナティブ教育を受ける子どもたちの数は同様に二万五〇〇〇人^{*3}を超えているという。

*1 教育部國民及學前教育署「106學年度實驗教育學校名單」

<https://www.k12ea.gov.tw/files/nonschool/106學年度實驗教育名單.pdf>

*2 教育部國民及學前教育署「113學年度實驗教育學校及機構名單」

https://www.k12ea.gov.tw/files/common_unit_id/d8533636-0498-4fd6-b456-2bceda3a8b4d9/doc/113學年度實驗教育名單.pdf

*3 教育部統計處「高級中等以下學校實驗教育概況」

<https://stats.moe.gov.tw/statedu/chart.aspx?pvalue=51>

私立校だけではなく、公立校の中にも、「実験学校」へと転換を遂げているケースが少なくない。台湾におけるオルタナティブ教育はすでに「普通の学校に馴染^{なじ}めなない子どもが選ぶ特別なもの」ではなくなり、学校ごとに豊かな特色を備え、多様な選択肢の一つとし

てごく普通に選ぶものといった存在感を示している。私自身、次の書籍のテーマにしようと考えているほど、「実験学校」たちは個性豊かで面白い。

台湾にも「不登校」という言葉は存在するが、普段の会話では「自分の子どもは自主学習だよー」など、「自主学習」という言葉を使うことが多い。

「自主学習」を経た後、社会に出て活躍している大人はギフテッドであるかどうかにかかわらずオードリー氏を筆頭に大勢いるので、全くネガティブな印象をともしなわない。それどころか「前のデジタル大臣と同じだね!」と誇らしげだったりもする。こうした社会の雰囲気も「子ども自身が自分らしさを感じ、幸せでいること」を大切にする保護者や教育者が増えている表れのように思う。

では、「自主」とは、そして「学習」とは何なのか。

本書はヤーチン氏のそんな問いから始まる。知識を愛し、新聞社のエース記者、大手経済誌の副編集長まで務めた彼女らしい、とても知的な営みだ。「種の親子実験小学校」での模索や、その進学先である中学の部を設立しようとした実験プロジェクトへの挑戦など、

すべてが順風満帆だったわけではないことも、リアルに描かれている。

もちろん、日本と台湾という異なる価値観、社会観でそのまま実践できるものばかりではないだろう。ただ本書の中には、今の日本で、不登校に向き合う子どもたち、保護者たち、教育者たちにとってきつと背中を押されるような気づきがあると確信している。

たとえば、「種の親子実験小学校」のユニークな制度がそうだろう。

この学校には、おかしいと思うことがあれば異議を申し立て、数名から学校全体まで、さまざまな規模で討論する「法廷」や、週に一度、全校児童と教師たちが一堂に会する「生活討論会」がある。遊具や共同設備の使い方、自転車の置き方など、学校にはさまざまな細かいルールがあるが、それらはほとんど子どもたちと教師たちが一緒に話し合って決めたものだという。

「自主学习」で育った子どもたちについて、ヤーチン氏が『成長戦争』の中でこう書き記していた。

「多くの人々が、そのような環境で育った子どもは自分勝手になるのではないかと心配するが、実際には全くその逆だ。学校内の規則は子どもたちの生活討論会の中で決められる

ので、策定に関わった子どもたちは包括的な思考と妥協の重要性をより深く理解することができている。生活の中で、協力するスキルが養われていくのだ」

本書の中では、「法廷」や「生活討論会」といった制度をヤーチン氏らがどのような考えのもとに築いていったのかが詳しく書かれている。これは、日本のホームスクールで学習を進めている子どもたちが、サードプレイスとしてのフリースクールや、友人たちと集う機会を設ける際にも非常に参考になる点だろう。

また、本書では何度も子どもが自己を認識することの重要さが繰り返されている。

私が何回か「種の親子実験小学校」を訪問した中で、大学に進学が決まった卒業生が「この学校で小さい頃から自分で決める練習をさせてもらえたおかげで、大学進学という人生において大切な決断をするときにも、上手に決められたと思う」と話していたことがある。「自主学習」で育った子どもたちは、自分の心の声を聞くのが上手であるようだ。

そして、本書では第五章・第六章の「話し合いの文化を築く」で、家庭編と学校編がそれぞれ用意され、保護者や教育者が子どもたちの声を聞くこと、そして大人自身が子どもに対して何を望んでいるのかを熟考するよう促している。

これで私が思い出したのは、「種の親子実験小学校」設立のためにヤーチン氏らが議論していた当時、小学六年生のオードリー氏が、大人たちに向けて問いかけた言葉だ。

「長い時間聞いていたけれど、子どもたちの気持ちになって話している声は聞こえてこなかった。子どもの声はどこですか？」

このように、本書にはヤーチン氏自身の絶え間ない自問自答や、たくさん子どもや保護者、教育者たちとの対話によつて積み上げられた「自主学習」実践のための心得や手ほどきがふんだんに盛り込まれている。子育ての手記である『成長戦争』とは違い、自らの経験を他者がより良く実践できるように、「自主学習」の道へと誘^{いざな}つてくれている。もちろん、たやすい道ではないわけだが、先人の知恵はありがたい。

日本では「不登校」というネガティブな言葉が浸透しているが、本書を読み終えた読者の脳内では、「自主学習」のような、ポジティブで主体的な言葉へとアップデートできるのではないだろうか。この翻訳がその一助になることができたのなら、こんなに嬉しいことはない。きっとヤーチン氏やオードリー氏らも喜んでくれるはずだ。